

第 1 1 回 歯 科 衛 生 研 究 会

平 成 1 1 年 7 月

講 演 抄 録 集

日 時 / 平成 1 1 年 7 月 2 2 日 (木) 午後 5 時 3 0 分

会 場 / 日本歯科大学新潟歯学部アイヴィホール

日本歯科大学新潟短期大学

歯科衛生研究会

会 長	伊勢村知子
委 員 長	高橋正志
企画運営委員	阿部邦昭、宮崎晶子、三富純子
庶務渉外委員	佐藤治美、片野志保、渡辺祥代
事務担当委員	入江三夫

[一般講演・講演者の方へ]

- 1) 使用できるプロジェクターは2台です。
 - 2) スライドはすべて研究会開始20分前までに受付にお渡し下さい。
 - 3) スライドホルダーは受付でお渡しします。
 - 4) 一般講演の割り当て時間は10分（予鈴9分で青ランプ、終鈴10分で赤ランプ）、討論時間は2分です。
 - 5) その他のお知らせ事項は当日受付で致します。
-

第 1 1 回 歯科衛生研究会プログラム

日 時 平成 1 1 年 7 月 2 2 日 (木) 1 7 時 3 0 分 ~ 1 8 時 3 6 分
会 場 日本歯科大学新潟歯学部 アイヴィホール
< 講演時間 1. 0 分、質疑応答時間 2 分 >

[開会の辞]

座長 渡部 泉 先生

< 1 7 : 3 0 ~ 1 7 : 4 2 >

1. 口臭症患者の治療 - 症例報告 -

新潟歯学部附属病院・歯科衛生科

新潟歯学部・歯周・口臭外来

○臼杵 野衣、坂井 由紀
北神 祐美子
大森 みさき、佐藤 修一
村山 恵子、斉藤 光博
今井 理江、堀 玲子
長谷川 明

< 1 7 : 4 2 ~ 1 7 : 5 4 >

2. 本学専攻科「歯科衛生予防処置特論（微生物系）」で行った実験

新潟短期大学

○安達 さおり、○安部 佳奈
丸山 寛子、山口 敦子
山崎 梨恵、乙川 るみこ
高本 愛、松木 奈美
本間 妙子、番場 綾子

< 1 7 : 5 4 ~ 1 8 : 0 6 >

3. 陥入歯（歯内歯）の形態と組織構造について

新潟短期大学

新潟歯学部・口外II

新潟歯学部・口解I

○高橋 正志
森 和久、又賀 泉
小林 寛

座長 阿部 邦昭 先生

< 1 8 : 0 6 ~ 1 8 : 3 6 >

[特別講演]

スポーツ歯学

新潟歯学部・補綴III・スポーツ歯科外来

○小司 利昭、高橋 徹
森田 修己

[閉会の辞]

○臼杵野衣、坂井由紀、北神祐美子（附院・歯衛）、
大森みさき、佐藤修一、村山恵子、斉藤光博、
今井理江、堀 玲子、長谷川 明（新潟・歯周）

○安達さおり、○安部佳奈、丸山寛子、山口敦子、
山崎梨恵、乙川るみこ、高本 愛、松木奈美、
本間妙子、番場綾子（新潟短大）

【はじめに】

平成10年6月に口臭外来が設置され、歯周治療科に所属する歯科衛生士および臨床研修歯科衛生士も何名かの口臭を主訴とする患者を担当している。

今回は、自臭症の傾向が強い症例を経験したので、治療経過を中心に報告する。

【症例】

患者：48歳 女性

初診：1998年11月30日

主訴：口臭

現病歴：5年前より起床時などに口臭を自覚、開業医を受診。そこよりガンセンターの内科を紹介され、当科への紹介となり来院した。

口腔内所見：初診時のブランクコントロールレコード（O'Learyら）は14.3%、歯肉出血指数は21.4%であった。4mm以上ポケットの存在は4.8%であった。

また、舌苔は舌後方2/3に薄く付着しているのが認められた。

官能試験では、やっと感知できる程度の口臭が認められ、口臭測定装置（ハリメーター®）の値は口臭がない人を示す値であった。

診断：自臭症

【処置および経過】

主治医と相談のうえ、通常の初期治療と平行し、舌苔のコントロールを行った。コーネル・メディカル・インデックス（CMI）の心理障害の判定は神経症を示す領域IVであった。現在、6ヶ月毎の定期検診へと移行している。

〈目的〉本学専攻科の講義のひとつ、「歯科予防処置特論」は微生物系、形態系、臨床系の3つの大項目からなっているが、今日までに微生物系の受講を終了した。ここでは、私たち専攻科生が関心や疑問をもったテーマを持ちより、担当教員の指導のもとに実験を行った。その結果、講義だけでは得られない興味深い体験をすることができたので、ここに報告する。5項目の実験テーマは一見したところ独立したテーマに思えるが、すべて「歯科予防処置」に直結しており、歯科衛生士として必須のテーマだと考えて、実験を行った。

〈材料と方法〉各テーマについて以下に概略する。

(1) 人工歯垢の形成

糖を添加した液体培地の入った試験官にガラス棒を入れ、これに各自の歯垢を加えた上で37℃で培養した。3日間毎日培地を交換し、ガラス棒表面に形成される人工歯垢を観察するとともにpHの変化を経時的に測定した。

(2) 口腔由来細菌の消毒剤感受性試験

口腔分離細菌を対象として、歯科診療室で常用される2剤の消毒剤について感受性試験を行った。方法は段階希釈法で、消毒剤の試験濃度は常用濃度およびその上下各2段階である。

(3) 口腔由来細菌の抗生剤感受性試験

口腔分離細菌を対象として、歯科診療室で常用されるものなど5剤の抗生剤について感受性試験を行った。方法は1濃度感受性ディスク法である。

(4) 歯科診療時における細菌飛散の調査

術者、介助者、患者の役割を分担した学生が、前頭部中央、前腕、胸部などにミリポアフィルターを装着して各種の施術を5分間行った。術後ただちにフィルターを寒天平板培地上に載せ、一夜培養して、生じたコロニーを数えた。

(5) 清涼飲料水その他による歯牙脱灰実験

清涼飲料水、果物の絞り汁などのpHを測定した後、その中に抜去歯牙を投入して、随時肉眼的に観察し、3週後に走査型電子顕微鏡を用いてそれぞれの表面を観察した。

〈結果と考察〉口演時に述べる。

陥入歯（歯内歯）の形態と組織構造について

○高橋正志（新潟短大）、森 和久、又賀 泉
（新潟・口外II）、小林 寛（新潟・口解I）

○小司利昭、高橋 徹、森田 修己（新潟・
補綴III）

〔目的〕 陥入歯では、舌側面窩のエナメル質が歯頸部付近まで陥入しており、陥入部がう蝕に罹患し易いために、う蝕予防の観点から、陥入歯の形態と組織構造が注目される。そこで、今回は、う蝕予防の観点から、陥入歯の形態と組織構造について詳細に検討することを目的とした。

〔材料と方法〕 材料として、抜去後、ただちに10%中性ホルマリンで固定された日本人の陥入歯5例を使用した。歯の表面形態を実体顕微鏡下で詳細に観察し、内部構造を軟X線撮影装置（SOFRON）で観察した。その後、唇舌側または水平方向の連続研磨標本作製し、偏光顕微鏡、位相差顕微鏡、マイクロラジオグラフィで観察した。また、同一標本の研磨面、およびエナメル質表面に平行な方向の再研磨面を10%NaOClで1時間処理後、0.05 N HClで3分間腐蝕し、水洗、アルコール脱水し、臨界点乾燥したのち白金蒸着を施し、S-800型走査電顕（日立）で観察した。象牙質の形成面も同様にして走査電顕で観察した。

〔結果〕 栓状歯の上顎側切歯の舌側面窩が小管状に歯頸部付近まで陥入して、陥入歯を形成していた。陥入部のエナメル質は、歯根側に向かうにしたがって徐々に薄くなるが、途中で再び急激に厚くなり、その後しだいに薄くなって、先端ではエナメル質を欠いていた。陥入部のエナメル質の狭窄部では、エナメル小柱の走向がエナメル象牙境とほぼ平行で、歯頸側に伸びていた。陥入歯の歯頸部エナメル質は円錐歯の上顎側切歯のものよりも厚く、組織構造の乱れが弱かった。

〔考察〕 陥入歯は、上顎側切歯の正常形とさまざまなタイプの退化形との比較から、上顎側切歯の盲孔が巨大化して形成されるものと考えられる。ただし、上顎側切歯の盲孔とは質的に異なる組織構造もみられるが、これは形成時に陥入部のエナメル芽細胞層が歯髄側に歯頸部付近まで陥入するという異常な挙動を示すためと推察される。陥入部のエナメル小柱の走向から、エナメル質の石灰化時にもエナメル芽細胞層が歯髄側に伸び出していたものと考えられる。陥入歯では、陥入部に食物の残渣が停滞し易いだけでなく、陥入部のエナメル質が薄く、小柱構造が未発達なために、う蝕に罹患し易く、う蝕の進行が速いものと推察される。

日本歯科大学では、昨年4月1日より、全国に先駆けて新潟歯学部付属病院歯科補綴科にスポーツ歯科外来が開設された。それに伴って、昨年、本学との交流の深いミシガン大学やオハイオ州立大学などを訪問し、アメリカンフットボールにおける現状やスポーツデンティストの役割、活動などについて調査し、アカデミーフォースポーツデンティストリーの一員として、学術大会などに参加してきた。近年、スポーツと歯科の関連については世界的に注目を集めている分野であり、この分野における調査研究の活動は今後ますます発展を期待されることが確認できた。

本学スポーツ歯科外来では、現在までに主な活動としてスポーツ時の外傷の予防としてのマウスガードの製作を行っており、一年間の総来院数は100を越えている。その内訳はほとんど総てがアマチュアのスポーツ愛好家であり、ごく一部がプロのスポーツ選手である。

スポーツの種類ではボクシングや空手などの、いわゆるコンタクトスポーツが最も多く、次にラグビーやアメリカンフットボールなどであった。年齢層は下は小学生から、中年までと幅広いが、中心となるのは10代後半から20代前半の年齢層であった。

スポーツと顎口腔系との関連については現在までに様々な研究報告があり、我々も顎口腔系と全身との生理的、機能的関連性について長年、検討を加えてきた。

そこで、今回はスポーツ時の外傷予防としての立場から、高機能型のマウスガードである、ラミネートマウスガードについて、その特徴や製作方法などを紹介するとともに、一般的な予防に対する認識やマウスガードについての認識についてアンケート調査を種々行っていることから、今回は日本体育大学との共同研究の概要とそれらのデータの分析結果について紹介したい。次に歯科医学におけるスポーツ歯学の分野の紹介として、全身と顎口腔系との生理的、機能的な関連性についていくつかの実例を挙げて紹介する。

次回の「歯科衛生研究会」は平成12年2月中旬（木曜日）に
開催される予定です。
多数の演題の申し込みをお待ちしております。
